

# 佐藤勝彦先生の定年退職にあたって

聞き手 下川和夫

今年度をもって佐藤勝彦先生が定年をお迎えになり退職されます。佐藤先生が札幌大学女子短期大学部に赴任されたのが平成元年（一九八九年）で、私が着任した翌年でした。以来、短期大学部、文化学部を通じて、同じ学部には属する教員として苦楽を共にさせていただきました。したがって佐藤先生とはほぼ二五年來のお付き合いということになります。文化学部の教員の中では最も長いということで、お送りする言葉を述べるという大役が私に回ってきた次第です。以下、非礼を承知のうえ、親しみをこめて佐藤さんと呼びすることにします。

まずはこの場をお借りし、感謝とねぎらいの言葉をお贈りしたいと存じます。佐藤さん、札幌大学の学生のために、また大学のためにご尽力いただき、ありがとうございます。そして佐藤さんは大学教員のあるべき姿を言わず語らず示してくれた、私にとっては師でもあります。心からお礼の言葉を申し述べたいと存じます。

佐藤さんは、まさに札幌大学が文科系総合大学として飛躍的に発展していく時期に、在職二四年の長きにわたって大学と学生のために尽力されてきました。

佐藤さんが赴任されて間もない頃に発足した「短大基本問題検討委員会」では短大の若手の中心メンバーとして精力的に議論を重ね、短大改革の方向性を打ち出し、それが短大改組転換による文化学部の開設につながりました。

短大離れが急速に進もうとする時代の趨勢を看破し、いち早く学部への再編を実行に移した先見の明があったればこそ、現在の文化学部があるのだと思います。

平成六年からは文化学部開設準備室委員の大役を務められ、平成九年の文化学部開設の立役者として激務を全うされました。文化学部籍を置く者として、佐藤さんをはじめとした開設準備室の方々のご尽力を忘れるわけにはいきません。その経緯はこの拙文の後に、ご本人の談話として紹介してありますが、その語り口からは想像できないほどの困難があったとお聞きしています。

文化学部発足後は教職課程委員と教務委員などを兼任される一方、平成一五年から二期にわたって入試部長の重責をも担われました。さらに平成一九年から二一年には文化学部長を勤めあげ、一貫して札幌大学の改革発展に尽力されてきました。

このように息つく暇なく大学、学部の要職を歴任されてきた佐藤さんの姿を近くで拝見していると、まさに粉骨砕身という表現では足りないくらい、全身全霊を傾けて校務、教育に当たられてきたように思います。

さて私にとって佐藤さんは師でもあると書きました。佐藤さんや私が札幌大学に来た一九八〇年代の終わり、つまり昭和が平成に替わる頃、女子短大部には四学科（国文学科、英文学科、文化学科、経営学科）がありました。さらに一般教養、図書館司書課程、教職特別課程を担当する総勢八名（哲学・心理学・教育学・美術・生物学・地理学・体育・図書館学）の教員グループがあって、人事権を持つ学科のような集まりでした。その中で佐藤さんは教職課程を、私は一般教育科目を担当しておりましたが、その後は二人とも文化学科の専門ゼミも持つようになり、同僚として親しくさせていただいておりました。

佐藤さんの気さくな人柄はみなさんもご存じのとおりで、多くの学生に慕われ、夜遅くまで骨身を惜しまず指導

に当たられていました。文化学科の専門ゼミを担当されるようになってからは、学生の目線に立った寛大で親身な指導に惹かれてゼミを希望する学生がひきも切らず、一学年のゼミを二コマに分けるなどの荒技を駆使するのが恒例でした。二桁の数のゼミ生など夢の彼方であった私には羨ましい限りでした。心理学担当の福井至さんが着任されてからは（一五頁のインタビューの談話にあり）、研究室が隣り合っていた事もあって、中央棟三階北奥の一角は、学生が常に群れ集まり、短大教育の拠点のひとつになっていました。いつ訪ねても研究室は学生で溢れかえり、ある者はパソコンのキーボードをたたき、ある学生はお菓子をつまみながらお茶を飲み、先生に質問する学生の横では他の学生が週刊誌をめくるといった具合で、雑多な行為が狭い研究室の中で、同時進行状態というのが常でした。大学時代に指導教員の研究室を怖々訪ね、冷や汗を流して帰って来ていた記憶と、佐藤研究室とは、そのギャップがあまりにも大き過ぎました。しかし佐藤研究室のカオス状態の中から、学生との心のつながりが生まれ、それが指導に結びついていると私は直感しました。赴任直後で短大生、しかも女子学生に対する指導に迷い、右往左往していた私には、佐藤さんの学生に対する気張らぬ自然な接し方は、自分の頃の大学生と教員の関係をそのまま持ち込み、学生とは一線を画すようなところがあった私には、大きな衝撃でした。それからは佐藤流を大いに参考にするようにし、学生の目線に立ち位置を移すことを心がけるようになりました。

ただしそれが毎日のように遅くまで続くのだから、ご自分の研究や講義の準備の時間がとれないのでは、と余計な心配をすることも度々でした。見ると研究室には電子レンジや炊飯器までもがあり、学生がいなくなった深夜から明け方がご自分の研究の時間だったというわけです。だから「佐藤は研究室に住んでいる」という噂は、あながち間違いではなかったようです。

当時の学生が話してくれた佐藤逸話のひとつに次のようなものがあります。佐藤さんの授業で、板書していた手

が止まったのでどうしたんだろうと見てみると、そのまま下方向へ、ツツとチョークの白い線が延びて行った。見ると佐藤さんは立ったまま寝ていた、というのです。教員としてはほめられたことではないのですが、あの頃の佐藤さんならさもあらなんと妙に納得したものでした。二四時間のほぼ一〇〇%を学生のため、大学のために使われていたのではないのでしょうか。

長年、大学人として活躍されてきた佐藤さんの経歴・業績等についてこれ以上、専門が全く違う私が至らぬ文でご紹介するより、ご本人の声を書き記すことの方が正確かつ適切だろうとの思いから、佐藤さんの研究、教育、学内運営に関する経歴やお考えについては、インタビュー形式でお話をお伺いし、以下のように文字に起こしてみました。なおお話しいただいた内容につきましては、下川の責任で編集させていただきましたことをご了解ください。

—— 佐藤さんは、来春（二〇一三年三月）、定年をお迎えになられます。文化学部で佐藤さんとの付き合いが一番長いのが私ということで、定年を迎えられる先生に、インタビューをさせていただきますと思います。

—— 佐藤さんが、札大に赴任される前は、北海道教育大学にいらっしゃいましたね。ある先生の使いで、電車通りにあった教育大（今の市立中央図書館の場所）に佐藤さんをお訪ねしたことを覚えていています。

（佐藤） はいそうですね。師範大学当時から建物ですから記念物的建物でした。同じキャンパスに付属小学校と中学校がありました。その付属とは違いますが、五つの分校の共同利用施設である北海道教育大学付属教育工學センターにおりました。現在は、改組されて「北海道教育大学付属教育実践研究指導センター」と名称も変わっております。

—— その施設で、どのような仕事をなさっていたのですか？

(佐藤) 簡単に説明しますと、北海道教育大学には五つの分校があり(本校はありません。事務取扱の本部は札幌校のキャンパス内にあります)、その共同利用施設として昭和四三年に設置されました。この施設は、大学における理論研究と教育現場の実践研究の橋渡しをする目的で、全国の教育系大学・学部(昭和四二年から順次設置されました。従って、大学・学部の付属ですので、それぞれの大学の事情によって仕事の内容は異なります。特に、五つの分校に分かれている北海道教育大学の場合の共同利用施設は特殊な事情の例です。

私が所属していた当時、大きく二つのテーマで実証的研究がなされていました。一つは、コンピュータ教育、もう一つは、環境教育でした。私は主に、コンピュータ教育の仕事をしていました。

—— そのコンピュータ教育の仕事について、もう少し詳しく教えてください。

(佐藤) 当時、文部省(現在の文部科学省)と通産省(現在は経済産業省)の共同プロジェクトとして、全国の小中学校にコンピュータ導入が進行中でした。ところが、教育現場では、コンピュータが導入され、先例のない中、「さて、どのように利用するか?」という試行錯誤が続いておりました。「教育現場にコンピュータがなぜ必要か?」という議論が十分になされないまま、更には、教育及び学習ソフトの準備がないまま、導入が進んだことが混乱を招く原因でした。そこで、当センターでは、教育及び学習ソフト開発が主な仕事の内容となりました。

—— どのようなソフトが開発されたのですか？

(佐藤) 個人での開発とプロジェクトでの開発の二通りあるのですが、プロジェクトとしては、筑波大学・学術情報処理センター(現筑波大学・学術情報メディアセンター)との共同開発として、へき地教育用CAIソフト(算数・国語)があります。この学習ソフトは、後志の島牧村歌島小学校(現在、廃校)で実践されました。CAIと

というのは、コンピュータと児童が対一で学習するシステムです。このシステムをへき地校でどのように実施したかと申しますと、当時の複式学級の場合、異なる学年を同一の教室で教えるため、どちらかの学年が授業を行ってある時、もう一方の学年は自習という形態がほとんどでした。従って、自習組にドリルのワークブックではなく、C A Iで学習する方が学習効果を高めることができると考えました。実施データの分析では、児童の学習意欲や成績等で効果があったことが報告されています。

もう一つ、プロジェクト開発を紹介しますと、「コンピュータ利用研究会／北海道」という会がありました。この会は、小学校・中学校・高等学校の先生たちが毎週土曜日、センターに集まり、多くの学習ソフトを開発しました。特に力を入れたのが、算数・数学のC A Iプログラムです。この学習プログラムは札幌市内の小学校、中学校で実験的に使われ、当時としては珍しさもあって、多くのメディアに取り上げられました。

個人での開発プログラムは、システム含めると数が多くなりますので、代表的な例としてC M Iシステム及びそのプログラムについてお話しします。C M Iというのは、先ほどの個別学習のC A Iとは異なり、教師が指導する学習場面を支援するコンピュータシステムであり、そのシステムを動かすプログラムを指します。『学習を支援する』というのは、補助教材やつまずいた学習者の補習教材などの教材開発と、もう一方では、学習結果の分析を行います。算数・数学の場合ですが、主に誤答分析を行い学習内容の難易度や『落ちこぼれの発見』などの学習診断に利用する分析結果を提供します。これらのデータは、学習についていけない児童・生徒の早期発見が行えることと、その対処（処方箋）を教師に提供することになります。このシステムは、学習者の学習履歴をもとに分析されるので、教師が学習者の学習傾向を把握するのに役立ちます。

—— 札幌へ移られたのは平成元年でしたね。

(佐藤) そうです。女子短大部の助教授として迎えていただきました。当時、短大部では、教職課程があり、英語と国語、そして社会の免許を出していましたので、その担当ということでした。

—— 短大部の学生が採用試験に合格して教職に就くのは難しかったのではありませんか？

(佐藤) 学生さんが優秀だったこともありませんが、当時は短大卒で先生になれたのですね。毎年三、四人が採用試験に受かり、本格的に教職に力を入れることになりました。教職専門は私だけでしたので、早稲田大学人間科学部大学院の福井至さんに来てもらいました。福井さんは臨床心理士の資格がありましたので、カウンセリングを中心に臨床心理学と発達心理学、生徒指導などを担当してもらいました。若い先生だったので、学生からも慕われ、大変人気者でした。現在は、東京家政大学文学部・東京家政大学大学院教授です。

—— その後、短大部の改組転換があり、文化学科と国文学科が四年制学部の「文化学部」に改組されました。その時、佐藤さんは確か準備室委員でしたね？

(佐藤) はい、そうです。現在は定年退職された塚谷周次先生が担当理事として、同じく定年された鷺田小弥太先生と私が準備室委員でした。

—— 文化学部が設置されたのが平成七年ですから、今年で一七年になります。文部省（現文部科学省）の規制緩和以前の改組転換は大変だったとお聞きしていますが…。

(佐藤) 審査は二年間かかりましたので、短大部として準備に入ったのが平成三年の秋でした。文部省の審査以前に大変だったのが、学内の同意を得ることでした。当時は全学部の教授会議事録に学部設置に「賛成」という文字がなければ、門前払いでした。全学部一致でなければならなかったのですね。それと、当時は大学設置の規制が厳しく、原則的に都市部には大学及び学部設置が大変難しい状況でした。但し、学部設置条件として留学生の受け入

れ枠（入学定員の1割）を決めることのアドバイスを文部省から受けることができました。更に、「文化学部」という名称が日本の大学で初めてだったので、名称の変更を求められ、その説得にも時間がかかりました。厳しい設置基準と審査、それに申請条件に対する学内の同意など難問が山積の準備室でした。

色々と紆余曲折がありました。何とか審査が通過し文化学部の設置が可能となりました。以後は下川先生もご存じのとおり、申請時に受験生が集まらないと反対していた学部の心配を他所に、派手ではありませんでしたが、入学定員を満たし当初の目的は達成されたと思っています。

——この度、学部を廃止して一学群制に改組することになりました。文化学部設置に尽力された佐藤さんは何か思うところがありますか？

（佐藤） 時代の変化への対応ということでは、しかたのない方針だったかもしれませんが、長い目で見たときの大学の存続が「学生あつての大学」と考えますと複雑な心境ですね。というのは、卒業生の卒業証書には明確に学部名が明記されています。大学名も併記されていますが、卒業生のアイデンティティは、出身学部なのでですね。

短大の「文化学部」はそのまま「文化学部」へ移行したことになりますが、国文学科はなくなったわけですね。この点については、大変議論しました。大方の意見が、今回の一学群制への移行のように、将来的に短大への受験生減少が避けられないという時代変化への主張でした。従って、改組という大学改革が受験生にとっての必然であり、世間が認める改革であってほしいと思います。その結果は、入試というデータに出てきます。改組という目新しさの改革現象が二年程度続きますが、その後の受験生獲得に今回の改革の真価が問われると思います。いかに一学群制の中身に、受験生が魅力を感じ、そこでの学びが将来の自分とどのように結び付くか、という見通しと了解が得られれば、そして就職率が高まれば、必ず受験生は集まってくれると思います。期待しております。



—— 本日は、長時間にわたりありがとうございました。これからはご自愛なさって、本学を見守ってください。ことを願い、インタビューを終わらせていただきます。